哲學研究　第二百九十號

マイネッケ「歴史的感覺と歴史の意味」

Vom geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte (1939)

堀　喜望

この書はマイネッケの主著の一つ、「歴史主義の成立」(1936)に次いでものされた著者の最近の論文集である。收むるところの六篇、その成立の時代にして主著に前後する間に成つたもので(1924-39)、謂はばその「副産物」とも云ふべきである。前著が歴史主義の成立を歴史的な發展に則して展開するのに對して、これは個々の主題に從つて歴史的事實との關聯に於て、歴史主義の本質的な意味を明かにすることを意圖してゐる。

元來「歴史主義の核心は、歴史的諸力の普遍的考察を個別化的な考察によつて置き換へるところに成立する」ものであつた。歴史的な精神的存在はマイネッケにあつては、單に概念的な普遍の類的な規定によつては把捉されない個別として、生命の流動的發展に於て理解されなければならない。從つてこの歴史的思惟そのものは、かかる流動性の原理として歴史的關聯から切り離されて、何處かに突如として存在する何ものかであることは出來ず、それ自ら歴史的な發展に於て形成されるものである。マイネッケに於て「歴史主義の成立」が、自らと對立する理性の自然法的普遍主義に基く近世の「啓蒙の歴史」をその豫備的段階としてもたねばならない所以である。かくてそれはこの歴史的發展的叙述に從つて、ライプニッツに始まる近世の普遍的個體主義と人間解放の啓蒙的自然法の廣汎な前史を展開しつつ、レッシング、ヴィンケルマンからヘルダー、ゲーテに繫がる「ドイツ運動」の内にその「成立」を跡づけてゐる。ランケによつて十九世紀のドイツ史學に於て開花した歴史主義の思想は、

このゲーテの内に流れ込む輝かしい個體の自覺にその成立を見出したのであつた。

それに對してこの書は、その成立の中心であつたゲーテをめぐる時代の前後に於て歴史的思惟の意味をあらはにし、更にランケ、ドロイゼンに到る近代史學の根本的問題に關聯しつつ、著者の歴史觀を明かにするものと云へよう。――先づ「十八世紀に於ける古典主義、浪漫主義、及び歴史的思惟」(論文第四)は、ヴィンケルマン、ルソー、ヘルダーの歴史と個性との自覺過程を通してゲーテに於ける歴史的思惟の成立を展開する。「シラーの『散策』」(第五)に於ては、ゲーテとの交友によつてこの自由の理想主義者が歴史的思惟と融合する流動の相があらはにされてゐる。「歴史主義とシュライエルマッヒャーの個體思想の成立史」(第六)は、彼のツインツェンドルフ兄弟團の宗教的教團生活に於て未だ熟しない個體の思想が、教團的普遍の抑壓の下に、無自覺的な形を以つて育成する力を宿し、この流動する姿に於て自らを展開する過程を辿りつつ、マイネッケの謂はば歴史的個體主義の辯證法を圖式的に示してゐる。「ランケの政治問答」(第二)と「ドロイゼンの史學」(第三)に於ては、ドイツ史學の完成者を埒して歴史主義の客觀性の要求と、その中に見出される人間性への深い愛と理想に結びついた實踐との媒介が語られる。最後に歴史的精神のこの流動性と個別性が歴史認識に關聯せしめられる「歴史と現在」(第一)の問題が、再びゲーテを中心として歴史學の反省に導き、歴史の哲學的自覺への深いつながりを暗示してゐる。――かくの如くこの書の構成は、それが時々の論文として公にせられたものであり、獨立に特殊の主題を奏でながらも、歴史主義の意味を中心として發展的に關聯し、歴史的發展の相に於て敍述されてゐることを見逃すことは出來ない。從つてこれは歴史主義の成立を見る上からも、曩の主著の中心をめぐる好個の手引であると共に、その本質的意味に關する問題を提供し、歴史の哲學的反省に對する手掛りを與へるものとして、興味深い意味を含むものである。

ともあれここで私に與へられた課題は、この著書の二三を解剖的に敍述し、マイネッケの歴史主義の意味を紹介すると共に、許さるべくばその批判にまで辿り得んとすることであつた。

歴史的思惟の問題は、マイネッケに於て一つのアポリアの形で提出されてゐる。精神的生及びそれから生じる歴史的形態は、絶えざる新しい様相と進展とに於てのみ理解される生命の奥深い幽冥なものを含んでゐる。それは流動的發展的なものとして、規範的な理性の概念を以つて一義的に規定することは出來ない。けれどもそれは歴史的生が形式なき混亂と、信仰なき怠惰な懐疑の内に放浪することを許すものでもない。「それは絶えざる流動ではあるが、而もまた形式と形態との絶えざる創造である」。(S. 86) 從つて歴史的生の課題は、ここでそれが自己自身の内に含んでゐるところの流動と形態との綜合媒介としてあらはれる。この綜合の過程を歴史的敍述に從つてあらはにすることが、第四の論文の意圖するところであつた。

理性の概念は、その普遍性に從つて凡ゆる人間を自己同一的な規準の外面性によつて規定し、その自然に、自然法の理性規範を以つて臨むものである。從つて流動的個性をとらへんとする歴史的思惟は、この自然法の外面的規範性に對して、人間の魂の深い内面性の洞察を要求する。かかる幽冥な流動性に於て、歴史主義の前段階として浪漫主義があらはにされる。それは不確實な内面的なものに對する激しい憧憬の精神であつた。而して浪漫主義のこの回想は、冷却した合理主義の「自らの時代に對する不滿」によつて、歴史的意識としての自己を自覺する。魂の美しい故郷として人間性の汚れなき自然狀態に對する憧憬が、かくて過去の原始的生活への反省、回想へと導いて行く。この幽冥な過去への回想によつて浪漫主義は、歴史的思惟への移行を含むのであつた。

しかし乍らこのことは、マイネッケに於てそれが唯一の前段階として、それ自體に於て歴史的個別の原理であることを意味するのではない。かかる自己主張による浪漫主義の氾濫は、生命の促進ではなく、却つてそれの阻止に終らなければならないであらう。歴史的生命が自然法的規範の一義的な規定によつて把へられないことは、同樣にまたそれの反動として對立する浪漫主義の原理を以つては、一義的に概念的に盡されないことを意味する。それは固と生命の流動性をその内實に關して過去の歴史に見出すものであつた。この魂の故郷への回想が、現在の反動として過去を理想化するとき、それは現在の連續から斷ち切られなければならない。特殊の過去を自

己自らで直接に絶對的とすることによつて、それは歴史の原理として、自己を固執する固定性の原理となり、生命の流動性が搾つてゐる現在への滲透を、枯渇した過去の内に見失ふであらう。かくして浪漫主義の憧憬は、それが歴史的な過去に於て流動性を直觀するものであつたにも拘らず、その對立に於ける自らの媒介を否定して、直接に自己を絶對的な原理とすることにより、流動的、個體的な過去が却つて固定された特殊な過去として恣意的な獨斷に終り、根抵なき相對性によつて否定されるであらう。

かかる浪漫主義の自己否定は、それが自己自身の内に移行を含んで居り、それ自體としての直接性に於てないといふことを意味する。卽ち不確實なる形なき生命の流動が、時代への批判と要求を通して自覺に於て過去の形態に理念の形式を定立するところの自己に於ける移行である。この浪漫主義の構造は、それと對立する理性の規範性が個體の生命に關して歴史的關聯の下に融合することを暗示する。自然法の規範的理念によつて啓蒙と深い内面的な繋りをもつ古典主義の思想が、その普遍性によつて個體の歴史的思惟に對立すると同時に、それの前段階の契機たる所以である。かくしてマイネッケに於ける歴史主義の成立はこの浪漫主義と古典主義との融合の過程に於てあらはにされるものであつた。

十八世紀の古典主義は、ギリシア古代藝術の美に於て藝術の範型と美の理念を見る藝術の態度として成立した。それは「完全化と完成の思想」を以つて歴史的な價値に絶對的な規範を求め、これを模倣の範型として普遍化するところに、啓蒙の自然法的理性の思惟を殘してゐる。けれども古典主義のかかる反歴史性にも拘らず、そのギリシア藝術への深い愛は、その高い美の一回的な個性に觸れるものがあつた。それは歴史的古代への洞察に導くと共に、ギリシア藝術の中に――尙ほ美の類型としてではあつたが――古代的生硬より完全化と、その段階的な沒落の過程を辿り、理念そのものの内に歴史的發展の相を宿してゐる。それと同時に理想化された美の理念は、高いギリシア藝術に於て「失はれた樂園」として再び到達されぬものを見出した。それは模倣を絶した「一回的な單一な個性的なもの」である。――かくして古典主義の規範性の理念は、歴史的個性と發展への移行を自らの内に含んでゐる。

如上「古典主義は、それが固定した規範によつて支へられてゐるので非常に固定した規範をあらはすやうに見える。しかしわれわれは、それがヴィンケルマンとゲーテに於て運動を生じ、魂の迫力により歴史主義に移行するのを見た。これに反して浪漫主義は根源的に極めて雲の如き形態としてあらはれる、この形態が古典的規範から離れて、様々な幽冥の欲求から様々な新しい人間的價値を探り出す。しかしこの渇求と感觸に拘らず、それは從來侮られてゐた過去の諸現象の中に突如としてまた形式と形態、意味と關聯を發見し、それによつて同時に歴史主義への道を開く。古典主義と浪漫主義は、その機能に於て歴史主義の成立に對して相互に補足するものであつた」。(S. 56)　歴史的思性の成立を、精神のかかる發展に於てとらへんとするマイネッケのこの態度は歴史的である。歴史的存在に於てはその發展的滲透によつて、概念的に互に對立するものが相に綜合されてゐる。「相互に對立するものが、たとひ論理的には合一出來なくても、尙ほ歴史的には順次にはたらき合ひ、互に稔らせ合ふことが出來る――これが實に歴史的發展一般の本質に屬するのである」。(S. 55)　この歴史的現實に對するマイネッケの洞察は現實の歴史的媒介による綜合の原理を暗示してゐる。しかしこの綜合は、マイネッケに於て、自己に於て否定的に對立する矛盾の相互媒介として同時に概念の否定性に於て自覺されることなく、歴史的存在の流動性に於て單に移行する個體の、自己自身に於て直觀される直接的な統一であつた。

かくてマイネッケに於ける歴史主義の成立は、個體の流動性に對する直觀的な愛による統一として、ゲーテの内に流れ込む精神の綜合である。從つて「個體とは云ひあらはせないものである」といふゲーテの言葉が、歴史的思惟にとつて核心をなすものであつた。かかる個體の理解には、ただ「感覺と感情とが共働しなければならない、否人間の魂全體が共に搖れ動かされるのでなければならない」。(S. 56)　流動的な個體の生命は、それに對する愛の共感によつてのみ全體的に理解されるのである。「ひとが知ることの出來るのは、ただ愛するもののみである」。「人間的なものに對する了解的な愛、見知らぬ形態への魂の移入」が、實にマイネッケにとつて歴史的發展の個別性に到達する橋であつた。

これによつて明かな如く、マイネッケに於ては、先づ

第一に歴史的精神の互に對立するものの綜合は、個別の了解的な愛によつて理解せられる。それは個體の直觀主義に他ならない。歴史に於ける對立する理念の綜合が、「反對の一致」として、ドイツ近世的思惟の源流をなす神祕主義の哲學者ニコラウス・クザヌスに由來するこの言葉に於て把へられた所以である。しかしかかる「一致」は、この傳統が暗示する如く「反對」するものの直接的な統一である。個體の「云ひあらはせない」本質は、愛と直觀とに於て一擧に到達され、その「反對」はかかる反對的なものの否定性によつて媒介される媒介性をもたず、無媒介的に對立するものとして個別の直觀の内に消滅しなければならない。

然るに歴史的精神の流動的な綜合は、「反對」の對立がその媒介に關して直接的、一義的ではないことである。それは、マイネッケ自身の敍述が物語つてゐる如く、その自己否定性によつて相互媒介的でなければならない。浪漫主義と古典主義は單にその「反對」によつて歴史主義の内に「移行」する單なる消滅的契機として、前段階をなすのではないであらう。對立するものは、その各の自己に於て矛盾する否定の契機によつて相互に媒介されるのであり、自己の矛盾によつて自己否定的に他に於て自己であるといふ媒介的な綜合に自覺されるのである。歴史的現實は、かかる自らの相互媒介の自覺に於て自己の統一として綜合の現實性を擔ふものである。從つてこの歴史的現實の綜合は、その相互媒介に於て個體の謂はば點的な直觀的統一でなく、同時に實在する空間性に於て自覺される媒介的な統一であらう。「歴史的な事物は凡て相互に移入するものであり、われわれはそれの間に嚴格な限界線を見るのではなく、常にただ多かれ少なかれ幅のある限界域を見るに過ぎず、個々の歴史的現象は屢〻自己自身に於て矛盾に充ちた、而もその際最も高い生命に充ちたものとして、あらはれることが出來るのである」。(S. 3)「幅のある」歴史的現實の矛盾的統一に對するこの洞察は、マイネッケの歴史家としての現實性を物語るものである。歴史的現實への深い接近を暗示するマイネッケの歴史家は、しかし乍らこの矛盾的なるものの自己否定的な媒介を「歴史的」現實性に於てあらはにすることなく、その綜合の把捉に關して、愛によつて飛翔する個別の直接的な直觀の「哲學者」として登場する。事實に於て概念の恣意的な規定を排除する歴史家マイネ

ッケの立場は、概念の否定的媒介に於て到達されるこの綜合の現實性に關して、その否定性をも排除することによつて、却つて神祕的直觀の思想家としての自己を見出さねばならなかつた。愛によつて一擧に了解されるかかる綜合は、生命自身の流動がそこに媒介され自己の統一を獲得する場所を何處にも見出すことが出來ない。かくして歴史的に實在する個體は、その歴史に於ける特殊的現實から遊離した空虛な活動として、謂はば天上に飛散された點の如くに消滅しなければならないであらう。

以上によつてマイネッケの歴史主義は、第一に流動に於ける個體の直接的綜合としての直觀主義であつたが、更にそれは流動の個體的綜合として時間の形式主義である。これは歴史的時間の問題として提出された「歴史と現在」に於てあらはにされるものである。

歴史の流動性に於ける「反對の一致」は、曩に歴史的思惟の成立に關して歴史的に敍述されたが、今や歴史的認識の問題として綜合的に展開される。卽ちそのアポリアは歴史認識の客觀性と主體性とのそれであり、過去と現在との歴史的時間に於ける綜合の課題を含んでゐる。そこに於ては過去の歴史的事實の客觀性に關して「强烈な禁欲」による事實への沒入と自己の沒却が要求されると共に、かかる利己的な自己ではなく、過去によつて育成され偉大なる現在的使命によつて充實された擴大された自己に於て、「歴史が自分の自己を再び意識する」主體性の極が見出される。過去と現在とは、その流動に於て「歴史家によつて對極的に把捉されるところの統一」としてあらはにされなければならない。

歴史が流動的、發展的であり、概念によつて規定出來ないことは、それ自體の要求としては歴史の相對主義を歸結する。歴史認識に於て概念的な普遍を斥ける立場はそれに於て原理を見出すことが出來ず、自らを非合理的な流動と連續の內に沒し去り、「信仰なき怠惰な懷疑主義」、原理なき機會主義へ導くものである。けれども人間はかかるものの內に自ら朽ち果てることを欲せず、單なる機能の相對性へ自らを解消することを意欲しない。それは個性の恒存性を確保することを要求する。歴史の流動性が、われわれの生命の內奥を豐富にし、人間的生の生成と發展とに觸れしめるものである限り、それは歴史的形象を、無限の生成の流れの內で、單に移り行く相

對的な契機に於て崩壞せしむるのではなく、同時に自己の尊嚴に關して建設的な力を擔ふものでなければならない。

歷史的時間のこの流動性に對して、人間の個性に關する永遠なるものへの要求は、先づこの時間の內に何等かの絕對的な確實性を見出さんとする。「浪漫主義」の憧憬は、幽冥なる過去への畏敬として、時間的な消滅に對して創造的な絕對性の價値を、歷史の過去に於て理想化するものであつた。これに對して時間の未來に於て人間の優越する價値を見るものが、「進步の樂天觀」である。因果的な認識により概念的には充分に把へられぬ過去の個體的生命の深みを開いたものは前者である。けれどもそれは、過去の絕對性に於て理想と規準とを特殊の過去に規定することにより、自らを規範的思惟となすと共に、その過去の特殊性によつて他に對立する恣意的獨斷に陷らねばならない。かくして過去は現在と觸れ合ふことは出來ず、却つて生命の育成を枯渴し、一切を腐蝕する相對主義によつて破壞せられるに到るであらう。同樣にまた自然法の樂天的進步の思想は現在の歷史的現實との矛盾によつて否定され、普遍的理念としての時間の未來を歷史的現在から切り離すことに終る。時間の平面に於て互に矛盾的に絕對性を求めるこの兩者は、かくして生成の流れに於て互に相對化され、時間の水平線の方向に自己を解消しなければならない。そこでマイネッケは、時間に於て平面的に對立する絕對のこの二つの理念に對して、第三の「垂直的」な立場に於ける綜合を要求する。すなはち瞬間が永遠であるといふ直觀である。過去と現在はこの流動する瞬間に於て集中しつつ永遠を直觀する。これはゲーテによつて深く暗示され、ランケの內に歷史的反省を見出したところの思想である。永遠は時間の平面に於ける無限の內に於てではなく、「現實と體驗そのものの心の中に根ざす思想」(S. 19) であり、瞬間の個に於てその生命の體驗を通して垂直的に把捉されるものである。永遠なる價値は個體的なるものに於てその魂の力によつて直觀される。瞬間が永遠に觸れるのは、かかる個別的生命の內面的な魂に於てである。過去と現在とを融合する永遠は、かくしてゲーテの體驗に基いて、瞬間の內に見出された。

かかる個別的なるものがそれによつて永遠に觸れる魂はマイネッケにあつて、個體の口を通して永遠の聲を語

り、その絶對的な意味を義務づける倫理的衝動――良心であつた。「良心に於て個別性が絶對者と融合し、歴史的なものが現在的なものと融合する」。「歴史の一切の永遠の價値は、結局行爲する人間の良心の決斷から生じるのである」。(S. 27)

以上によつて明かな如く、マイネッケの歴史的思惟は歴史的認識の時間綜合に基く主觀性の立場である。歴史が時間的存在である限り、その時間性の問題は歴史學に於て本質的なものを形成することは否定出來ない。けれどもマイネッケの直接的直觀の綜合は、この時間綜合を單に空虛な形式的統一へ導かなかつたであらうか。歴史的時間に於て見出される過去と未來との矛盾は、マイネッケに於て各自己否定的であることによつて二重の矛盾をあらはにする。この矛盾の二重性は曩にも見た如くマイネッケの歴史的現實への深い洞察を示すものであつた。けれどもそれは、マイネッケの直接性にあつては單に消滅的な自己矛盾の相對性として、時間の水平面の内に相互を解消する。それは自己否定的に相互に他に於て自らを實現する媒介性をあらはにせず、從つてかかる否定性の自己綜合への威力を見出すことなく、永遠の媒介から切り離されて時間の平面に於ける消滅性の契機に過ぎなかつた。それ故にマイネッケの時間綜合は、かかる時間の平面に對して單に直接的に垂直に限定する媒介なき無限の活動として、瞬間の内に直觀される永遠に於て求められる。この永遠の垂直的限定は時間の平面に於ける内實的な媒介に對して無媒介にあらはにされる。從つてそれは内實的な自己の媒介から斷ち切られ、單に形式的な良心の活動に於ける空虛な統一である。

マイネッケの歴史的思惟が、歴史的現實の綜合を形式的時間の綜合として把捉し、謂はばこの時間の範疇によつて綜合の原理を主觀性の純粋活動に見出したといふことは、その歴史認識の認識批判より必然的に歸結するものと云へよう。歴史の現實に關して概念の反省的規定を否定するマイネッケの立場は、現實性に於ける概念の否定的媒介を見ず、從つて實在性に關して直觀の直接的綜合に委ねられ、その媒介の原理の反省を單に主觀性の契機に限り、單なる認識の領域に限定される。かくして歴史家としての現實的認識そのものの豐富な成果が自覺にまで媒介されることなく、認識主觀の媒介なき反省に終り、かくして歴史的現實の内實性を解消する認識批判の

主觀性に於ける時間の立場に止まらねばならなかつた。

かかる主觀性の契機は歴史的流動を個體の形式的良心に於て綜合するマイネッケの道德主義を導くと共に、その內容なき純粹なる直觀的綜合に於て個體の絕對的價値の原理を見出す文化主義を胚胎する。マイネッケの歴史的思惟が、歴史的現實の洞察に於て矛盾的なるものの「反對の一致」の思惟の內にヘーゲルの辯證法との接近を示しつつ、個體的直接性の綜合をゲーテの藝術的直觀の立場に於て見出したことは、決して單なる偶然ではない。

然るに歴史は時間の主體的統一であると共に、單に形式なき時間に止まらず內實的な統一である。それは時間に於て實在するところの精神として、單に時間に解消出來ない同時に空間的な媒介を否定的に含むものである。時間の矛盾は現實の否定性によつて自己否定的なものとして相互媒介的に自らの實在性を自覺するのであり、かかる現實性に於ける媒介的な實在性の契機が空間性に他ならない。歴史は實にこの「此處」と「今」との相互的媒介に於て具體的な現實性を獲得する。それは單に個體の活動的、道德的な主觀性の統一に止まらず、同時にそれが特殊の媒介に於ける實踐的、人倫的な綜合として實在する精神であらう。――かくしてわれわれはヘーゲルの客觀的精神の哲學、「法の哲學」に記された有名な言葉――「ここがロードス、ここで踊れ」の一句の深い意味に想ひ到るであらう。

（附）尙ほマイネッケのヘーゲルに對する關係は、彼自身のヘーゲル批判を含む最後の論文に於て展開され、それによつてヘーゲル的汎論理主義に對して個體の流動性の立場が闡明され、示唆に富んだ理論を含むのであるが、今はこれに觸れることが出來なかつた。そこではヘーゲルの辯證法の圖式に對してマイネッケの矛盾の二重性に基く個體主義の圖式が明確に述べられてをり、ヘーゲルとの關聯に於て歴史主義の多くの問題を含む興味ある一篇であることを附記するに止めねばならない。――一五・四・二三――